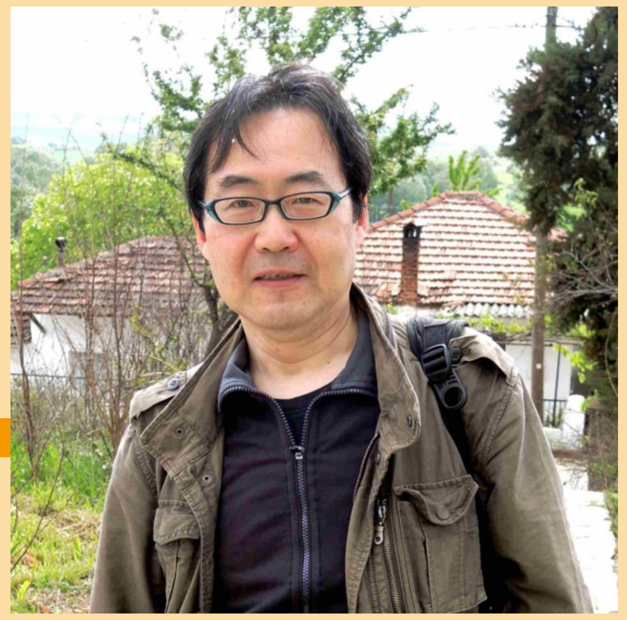
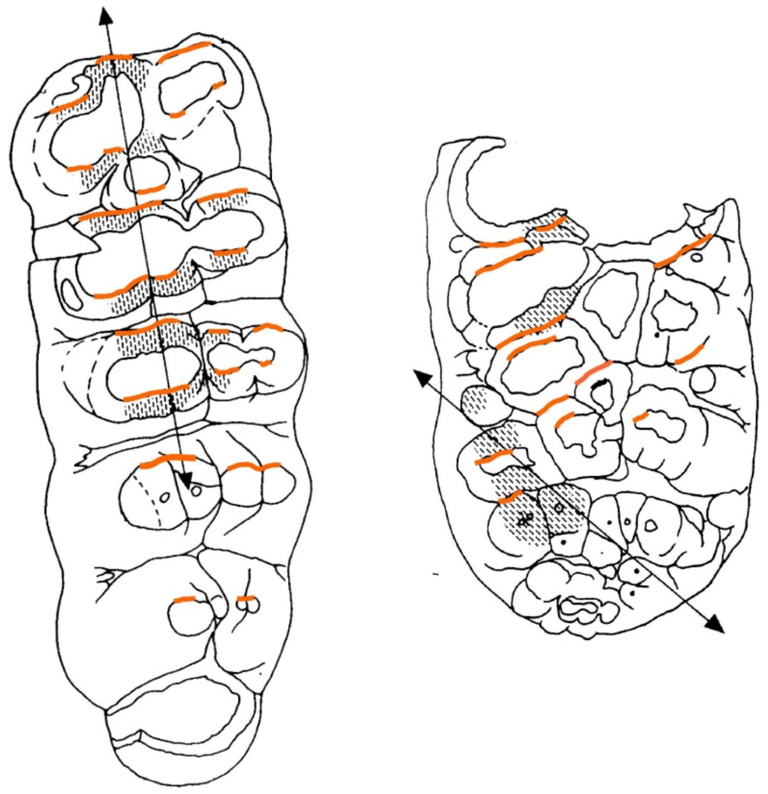
長鼻類と恐竜類化石の研究



自然・環境評価研究部　地球科学研究グループ　　三枝　春生

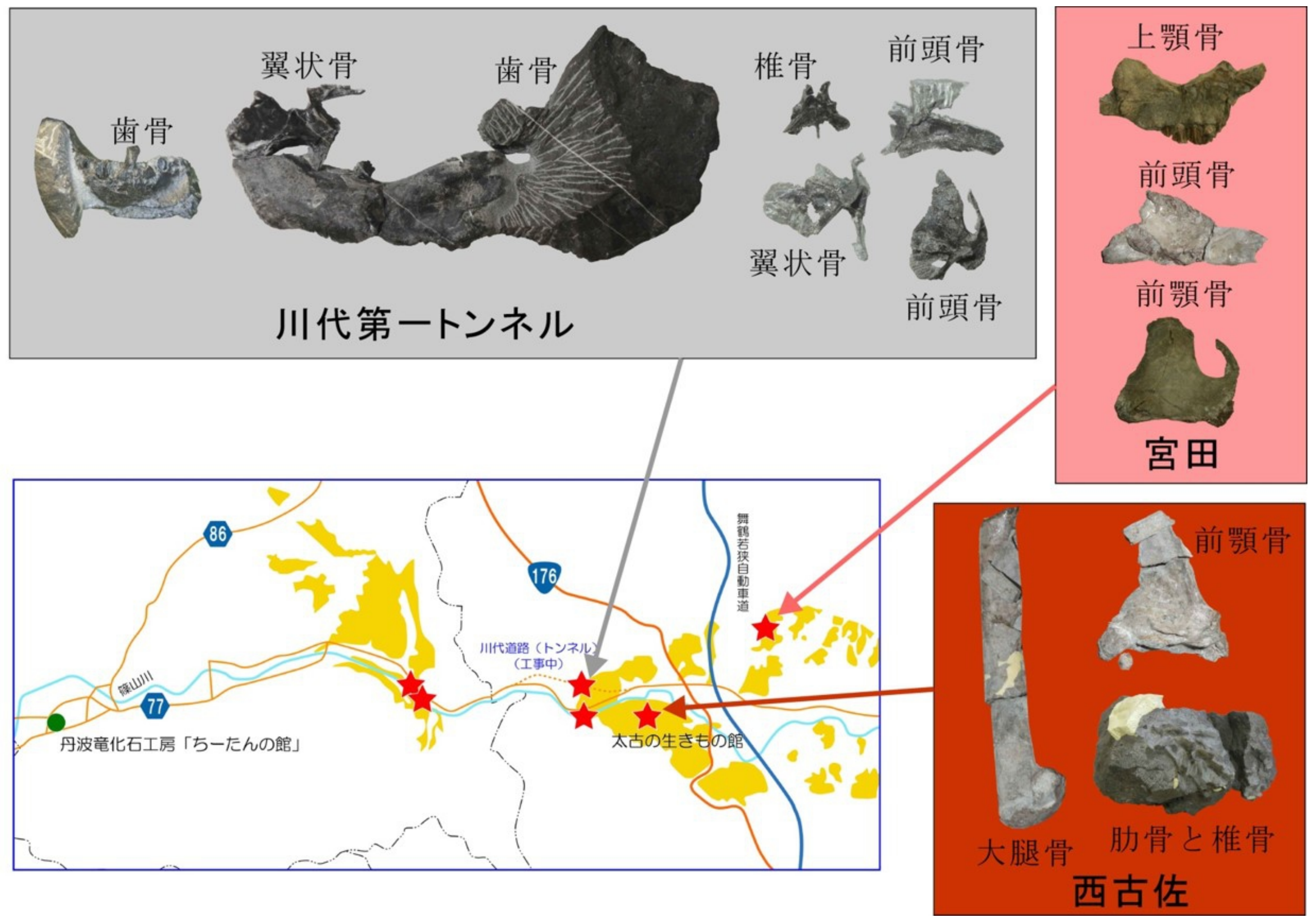
1．後期新生代の長鼻類（象の仲間）の研究

後期新生代(約2800万年前以降）の旧世界(アフリカとユーラシア)における長鼻類の進化を研究しています。最近はミャンマーの後期新生代の地層であるイラワジ層とペグー層から大量に産出する長鼻類の化石を京都大学霊長類研究所の霊長類化石探索プロジェクトの一環として研究しています。また長鼻類の歯の形の進化と咀嚼の仕方の変化の関連、さらにはそれらに対して気候の変化が及ぼす影響についても研究しています。

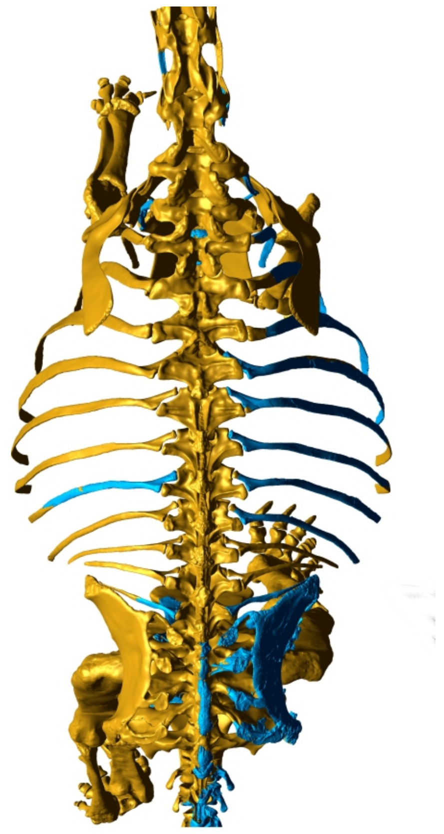


歯の表面に残る擦り傷から咀嚼時の顎の運動方向を推測することが出来ます

ヤンゴンのザイカバー博物館所蔵の長鼻類化石（臼歯付きの下顎骨や上顎骨）



篠山層群産角竜化石とその産地



タンバティタニスの胴体骨格復元

2.　篠山層群産植物食恐竜の研究

丹波篠山市と丹波市にまたがって分布する篠山層群大山下層（約1億1千万年前）からは、恐竜をはじめとする様々な脊椎動物化石が産出します。それらの内、竜脚類（首の長い巨大な植物食恐竜）の一種であるタンバティタニスと原始的な角竜類の化石を研究しています。タンバティタニスの化石では肋骨が比較的よく保存されているので、他の竜脚類の肋骨との比較を進めています。原始的な角竜類の化石に関しては、新種となるかどうかを現在検討しています。